慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジエイ・ エス・ ミルの経済学方法論
Sub Title	
Author	浜田, 恒一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.2 (1931. 2) ,p.259(131)- 304(176)
JaLC DOI	10.14991/001.19310201-0131
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310201-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

23) Mirecourt, E. de.—Blanqui (Les Contemporains No. 91) Paris 1857.
24) Morange, G.—Les idées communistes dans les sociétés secrètes et dans la presse sous la monarchie de Juillet. Paris, 1905.
25) R,—Blanqui devant les révélations historiques. Bruxelles 1859,
26) Ranc,—Auguste Blanqui (Le Voltaire 3. Janv. 1881)
27) Sencier, G.—La Babouvisme après Bibeuf. Paris, 1912.
28) Stein, Lorenz—Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich.
29) Tchernoff. I.—Le parti républicain sous la monarchie de Juillet. Paris, 1901.
30) Thomas, Al.—Blanqui im Jahre 1834 (Dokumente des Sozialismus. Bd. II)
31) Thoré,—La vérité sur le parti démocratique. 1840.
32) Velichnika,—Blanqui. Moskva, 1921.
33) Wasserman, S.—Les clubs de Barbès et Blanqui en 1848. Paris, 1913.
34) Weill, G.—Histoire du parti républicain en France. Paris, 1928.
35) Zévaès, A.—Auguste Blanqui, patriote et socialiste français. Paris, 1920.
36) 小泉信三、マルクシズムとボルシェヴィズム。和昭四年版
37) 平井新、バブウフ主義と秘密結社（三田學會雜誌第二十四卷六號）

ジエイ・エス・ミルの經濟學方法論

濱田恒一

（一）

セイは「國富論」を評して曰く「スミスの著書は最も明瞭なる實例と、最も珍奇なる統計の觀念とに支持せられ、且つ教訓に滿ちたる幾多の考察を交へたる、最も正しき經濟學上の原理の、雜然たる集合に過ぎずして、完全なる統計學の論著にも非ず、完全なる經濟學の論著にも非ず、その著書は正しき思想と確實なる知識との、雜然として混在せる一大混亂たるなり」と。故に「經濟學」の筆は經濟學の範圍の決定に始る「科學はその研究の及び得る範圍とその研究の目ざす目的とを明確に定め得るに至れる場合に於てのみ、眞の進歩を來し得るものである」（セイ「經濟學」上卷、第三頁、增井幸雄譯）

經濟學は先づ政治學と區別せられる。前者は社會の諸欲望を滿足せしむべき富が、如何に生產され、分配され、消費せらるゝやを教ふる學なるに對し、後者は社會の組織の科學である。固より政治的事項は富の增減に無關係なるものではないが、それは結局、間接的に然るに過ぎずして、本來、

富は政治組織とは全然獨立のものである。絶對君主制の下に在つて富を增進せる國があると共に、民選議會の下に在つて破滅せる國々も亦少くないのである。然るに善良なる政治を構成する原則と公私の富の增加の基礎たる原則とを、同一の研究中に混同せる者が多い。ジェイムズ・スチュアート、「經濟學者」等皆然りである。

經濟學は惟り政治學の範圍に侵入したるのみならず、農・工・商業等の範圍をも犯したのである。けれ共若し、例へば商業が經濟學の一部分を形成するものとすれば、商業の凡ゆる種類は當然經濟學の一部を形成する事となるべきであるから、從つて海上商業もその一部分を形成することゝなるべく、その結果又航海も地理も……と云ふが如くに、底止する所なきに至るであらう。經濟學が農業工業及び商業を研究するは、是等と富の增減との關係に於てのみに限らるゝものである。人間の知識は總べて相互に關聯せるものである。故に接觸點を、即ち、是等の知識を聯絡する聯節を發見し適當に決定せむことに努むるを要する。かくて始めて各部門に關して、一層的確なる知識を得べく、又常にその本質の一部をなせる相互的關聯の、那邊に存するやを知るを得べきである。（前掲書三―六頁）

凡そ科學の對象は事實である。事實には二種ある。一は存在する事物にして、他は起り來る事物である。而して事物が如何樣にあるや、並びに事物が如何樣に起り來るやは、所謂事物の本性を構成する。而して事物の本性の正確なる觀察こそ、有ゆる眞理の唯一の基礎をなすのである。

こゝに於て植物學の如く、事物を命名し分類する事を內容とする記述的科學と、物理學の如く、事物相互間に行はるゝ相互的作用を、換言すれば、原因結果の關係を知らしむる經驗的科學との別を生ずる。經驗的科學にありては、事物の本來の性質を研究するを要する。蓋し事物の作用して結果を生ずるは、事物の本性に基くからである。事物の本性は、時として細心なる分析のみに依りて知り得る事がある。又、時としてはその結果に依らなければ、之を完全に知り得ない事がある。何れにしても、特に行ふ實驗に訴ふることの不可能なる場合に於ては、分析によりて知り得たる所のものを確めむが爲めに、觀察を必要とする。而して經濟學は正に經驗的科學に屬する。

從來經濟學に於ては、眞理を樹立するに先ちて先づ臆說を立てた。然るにその後に至つて、ベーコン以來、他の有ゆる科學の進步に多大の貢獻を致せる研究法を、經濟學にも應用するに至つた。詳言すれば、觀察と經驗に依りて眞なる事の證明せられたる事實でなければ眞理と認めず、之より當然に引出し得る結論でなければ、恒常不變の眞理と認めずとする所の經驗的研究法を採用するに至つたのである。（前掲書八―一〇頁）

經驗的方法に於ける最要なる一問題は、事實を如何に取扱ふかの問題である。セイはベーコン以來の方法を用うると稱するも、ベーコンの方法そのものは、決して多くの效果を齎らし得べき性質のものでない。單に熱の形相を知る爲めに如何に多くの事實を蒐集するを要するかを思ふ時、一科學の建設に要する事業の數は、眞に無數であらう。洵にボアンカレーの言へる如く、科學者に向つては、たゞ「視よ、正しく視よ」と告ぐれば足るべきの理ではあるが、科學者は一切を視盡す程の時間を、況して一切を正しく視盡す程の時間を有する事がない（ボアンカレ「科學と方法」岩波文庫第七

頁）。こゝに於て選擇の必要を生ずる。故にセイも曰ふ「眞理に到達せんが爲めには、多數の事實を知らむ事を必要とせず、單に根本的にして眞に有力なる事實を知り、之を有ゆる方面より觀察し、特にそれより正しき推論を導き、その斯かる事實より來ると做す所の結果が、確かに右の原因のみより來るものにして、他の原因より來るものにあらざることの確實を期するを必要とするのみ」と（セイ前掲書第二十頁）然らば這般の必要を充たすに用うべき論理的方法如何。之に對する充分なる解答は、ミルを俟つて與へられなければならぬ。セイに在つては、たゞ正しき觀察が之を爲し得べしと語らるゝのみ。

既に經驗と觀察に對し至上の重要性が與へらるゝ以上、抽象的論法が非とせらるゝは當然の事に屬する。就中最抽象的なる方法として數學的方法は「計算の基礎たらしむるに足る程に正確なる與件を發見せむ事は不可能なり」との理由を以て排除せられる。數學的方法は必ずしも算數的方法に非ざるの一事は、セイの腦裡に浮び來らなかつた樣である。

セイの方法論的立場は亦諸先人の方法に對する彼が批評の裡に看取せられる。

論難は先づ「經濟學者」に向けられた。セイに從へば彼等は先づ事物の本性、即ち、物が如何にして生ずるものなるやを觀察し、次にその觀察を分類して之より通有性を導き出すの方法を取らずして、先づ抽象的の通有性を立て、之を呼ぶに定理の名を以てし、且つ之を以てそれ自ら明白なりと信じた。而して彼等は次に個々の事實を、是等の通有性に歸着せしめ、之よりして法則を導き出した。かくして彼等は明かに良識と數世紀間の經驗とに反するが如き種々の格言を、辯護せざるを得ざるに立ち至らしめられたのである（セイ、前掲書四四―四五頁）之に反し、スミスは抽象的に原則を求むることを爲さず、最も恒常不變的に觀察せらるゝ事實より遡つて、かゝる事實をその結果として生む一般的法則に到達するの方法を採り、以て科學研究の新方法を經濟學に應用せるものであると云はれる（前掲書五五頁）リカアドオ一派は再び非難の的となる。曰く「リカアドオ一派の英國經濟學者は、予の見る所を以てすれば、一般的經驗に非ざれば基礎として承認することなき何れの科學に於けるとも等しく、經濟學に於ても採用し難き一種の論法を、斯學上に導き入れむとせり。抽象の上に安座する論法之れなり。……リカアドオが地主の所得は物の價格の一部を構成せずと云へるとき彼は議論に基いて原則を樹立したるは掩ふべからざるの事實なり。而も此の原則よりして彼は多數の推論を導き、而して是等の推論が、恰も恒常不變的の事實なるかの如くに、更に之よりして他の推論を導き出せり。故に若し最初の與件にして正確ならざらむか、之を基礎とする總ての推論は、假令推理そのものは非難の余地なきものなりと假定するも、以て何等眞實の敎義に導くこと能はず。事實に於て此の英國學者の得たる結果が經驗の裏切る所となれるは稀なりとせず」と（前掲書二八―三〇頁）洵に「經濟學は觀察の科學となる時、始めて一個の科學となる」（前掲書四九頁）ものなり。然も單に事實より出發するのみにて不充分である。リカアドオの假設はセイによるも「異論の余地なき觀察の結果に基づき、從つて何人も攻擊すること能はざる如き假說」なる事が認められた。然るにその結果が誤れるは、リカアドオが這般の假說より推理を進めて、その最後の推論に到達したる後、毫も是等の推論の結果をば、經驗の示す結果と比較しなかつたからであるとせられる。リカア

ドオ沒後に生じたるその一派は、他の一切の原則を考察の外に置き、僅に少數の原則のみよりしてその有ゆる推論を導き出し、遂に多數の法則の結合作用たる實際の場合と異る結果に到達した。セイは斷言して曰く「かゝる研究方法は經驗と良識とより離れざらむことを欲する第十九世紀の研究方法に非ず。これ嚮てトーマス・トウック、ロバート・ハミルトンその他、多數の優秀なる英國の諸經濟學者がスミスの經驗的研究方法を遵奉し居れる所以たるなり」と。（前掲書七五―七七頁）

如上の所言を要約するに、經濟學の前提若しくは根本原則が事實の觀察に依つて獲得せらるべき事が主張されるのみならず、その結論亦事實の檢證を經べきものなることが力說せられる。かくの如き實證主義的傾向を、セイは何處より得て來たのであるか。セイは早く既にコンディヤック式觀念學を奉ずる一派に加はれるものであつてデテュー・ド・トラシーの言を藉りて云へば「最大の細心を以て事實を觀察し、充分なる確信あるに非ざれば推論を導き出さず、單なる想像に對しては、決して事實としての信を置かず、眞理が全く自然的に連繫して、何等の虛隙なき時にあらざれば、是等を互に結び付けむことを企てず、知らざる事は之を率直に告白し、單に信實らしきに過ぎざる一切の斷言よりも、常に絶對的の無知を選ぶ」所の所謂コンディヤック式方法に執着せるものなり。（前掲書解題」二七―二八頁）

（三）

トーマス・ロバート・マルサスは「經濟原論」の序に於て次の如く言ふ「經濟學に於て、單純化の願望は、特殊的結果の發生に一個よりも多數の原因が作用するを、認めることを欲せざるに至らしめた。若し一原因が、或一種の現象の相當なる部分を說明するに足る場合には、直ちにその全部を之に歸し、かゝる解決を許さざるべき諸事實には、充分なる注意を拂はず……又、この單純化し概括せんとする傾向は、何等かの命題に對して、修正制限及び例外を許容するを好まざる傾向を生みかくて「早急なる概括の傾向は、二三の主要なる經濟學者に於て、何等の理論を事實に照合するを、好まざる風を生ぜしめた」と。從つて彼の態度が實證的たるは言を俟たぬ。洵に「フィロソフィの第一任務は、事實をあるがまゝに說明することである」。之が爲めには多數の事實が綜合されねばならぬ。故に曰く「個々の事實を過重視する事に於ては、余は最も人後に立つものである」と。「本來、經濟學は實際的のものであり、人間の日常生活に適用し得るものでなければならぬ。かくて「この著作の特有なる目的の一つは、屢事實に訴へ、又特殊的現象の發生に於て起る一切の諸原因に就きて、可及的廣汎なる觀察を行ふ事によりて、實地應用の爲めに、經濟學の一般原則を作らむとするに在り」Principles of Political Economy, considered with a view to their practical application なる表題は這般の意圖を明白に語るものと云ふべきである』(ibid. 1820, Preface)

轉じてその「人口論」を見るに、洵に時間的並びに空間的に廣汎なる範圍に渡りて、數多き事實が蒐集せられたるをみる。この事實に照合するの傾向は、第二版以後、版を重ぬるに從つて益顯著となる。之が爲めに人は屢彼とリカアドオとを對比せしめ、後者を演繹的と呼び、前者を歸納的と呼ぶ。兩者の方法論的態度が著るしき差違を示せるは固よりであるが、それは必ずしもマルサスを歸納的と呼ぶを許さない。何故ならば、その蒐集せられたる多數の事實は、依つて以て人口原理を抽

出し來るべき素材としてに非ずして、却つて既に樹立されたる人口原理の說明乃至檢證として用ゐられる。而して原理そのものは、普遍的事實より演繹されたる一の結論である。かの等差級數と等比級數の對立の如きは、單に人口原理の一表現形式たるに外ならない。（註）普遍的事實より理論を演繹し、その結論を事實に照合して檢するの方法は歸納法に非ずして、ミルの所謂具體的演繹法に外ならない。洵にイングラムは曰ふ「歷史的研究は總てマルサスの後思案である。之に入るに先ちて、既に彼は彼の根本原理を宣明せり」と（Ingram, History of Pol. Econ., p. 114）

（三）

一八三七年に於ける見解に依れば、シイニオアは經濟學に理論的部門と實際的部門の存するを認めたるも（An Introductory Lectures on Political Economy 1827. p. 7-8）一八三六年に於ける「經濟學」に於ては、後者の部門は斷然廢棄せられ、經濟學を以て單に「富の性質、生產及び分配を論ずる科學」なりと定義し、以て偏へにその科學性が力說せられたのである。メルシエー・ド・ラ・リヴィエール、サー・ジェイムス・スチュワート、ストルヒ、シスモンディ、セイ等諸學者の見解は、孰れも經濟學本來の眼目たる「富の研究」外に逸脫し、福祉の研究を云々するものとして斥けられた。啻に經濟學の範圍が不當に擴張せしめられてはならないだけでなく、亦經濟學は一切の實踐的目的と結合せらるべきでない。過去に於ける之が結合は經濟學の方法を邪道に導いた。「多數の經濟學者が事實の蒐集に過大の尊重を置き、眼前の事實よりする正確なる推論過程が遙に重要なるを忘却せるは、彼等が經濟學の目的を更に廣汎に考へたる事に歸すべきなり。吾人は絕えず經濟學は事實と實驗の學、事實を渴望する學なりと告げらる。固よりその應用は諸他一切の科學の應用の如く、殆んど無限に廣く事實を蒐集し、之を檢査するを必要とするも、然も斯學の一般原理が據るべき事實は僅に數句、否、數語の裡に述べらるべし」と（拙譯經濟學、八―九頁）而して彼が揭ぐる經濟學の基本命題は、一、富に對する一般的願望　二、資本使用に基く生產力の無限なる增加の可能性　三、收益遞減法則、四、人口法則の四個にして、是等は意識又は觀察に依つて取得せらるゝものである。孰れにせよ、この點に於ては彼の方法は當然經驗的にして、やがてこれよりして推論を行はむとするものである。

その結論は、前提が一般的なるが故に、亦一般的である。富の性質及び生產に關するものに至つては、普遍的に眞なりと稱せらる。富の分配に關するものは、特定の國の特定の制度に依つて影響を蒙るの傾向があるけれども――例へば奴隸制度、穀物法又は救貧法の場合に於ける如く――事物自然の狀態を一般原則として定め得るものにして特殊の妨碍原因に依つて生ずる變則は後に之を參酌し得るであらうと（An Introductory Lectures on Pol. Econ., 1827. p. 8-9. p. 34-36）

この意見に從ふも、又、彼が「經濟學」に於て實際に行へる處をみるも、シイニオアの經濟理論が高度の抽象性を有するは、疑ひのなきところである。問題はこの高度の抽象性を有する經濟理論を、假說的定理と看做すべきや否やである。ミルは之を假說的と看做すものである。曰く「經濟學は富を所有せんと願望し、且つこの目的を達する手段として有效なるものを、比較判斷し得る者としての人間にのみ關するものなり……そは富の願望に對する反對たるもの、即ち、勞働忌避と費用高き悅樂を現在享樂せんとする願望を除き、諸他一切の感情又は動機を全く抽象し去る……決して如何

なる經濟學者と雖も、實際に人類がかくの如く造られたとりと考ふるものに非ず。たゞ、この型式が、依つて以て、經濟學の必然採るべき型式なるが故のみ……人間の生活中には、富の獲得を以て、主目的とする部分あり、經濟學が注意を向けるは、この部分のみなり。經濟學はその主たる目的を恰も唯一の目的たるかの如く取扱ふ。そは事實より出發せずして、假定より推論す。そは假說の上に建てられたり。それ等の假說は、定義なる名稱の下に、他の抽象的科學の基礎たる處のものと、全く相似たるものなり。……經濟學は假定せられたる前提より、恐らくは事實には全然基かざる、而して、又、遍く事實に一致する事を要求せられざるべき前提より推論す。故に經濟學の結論は、幾何學の結論の如く、抽象に於てのみ眞なり」と（Unsettled Questions of Pol. Econ., p. 137-145）

シイニオアはミルの意見全般を頗る尊重するも、この經濟學を以て假說的科學なりとする主張には、同意を表せず、之が修正を提案し、「富と費用高き悅樂とは人間願望の唯一の對象なり」といふミルの假定に代うるに「それ等が汎く不斷の願望對象なり」との敍述を以てすれば、爾後の推論が確實なる基礎の上に置かれ、專斷的假定の代りに、眞理が置かれるものといひ得べきを主張する。洵に吾人は或一定の行爲に依つて、勞働者がより高き勞銀を、資本家がより大なる利潤を、地主がより高き地代を取得し得べしとの事實よりしては、彼等が確にしかく行動すべしとの事實を推論するものでない。吾人は妨碍原因がなければ彼等はかく行爲すべしと推論し得るに過ぎない。然し、吾人にして、若し如何なる場合に這個の妨碍原因の存在を豫期し得べきか、亦、それ等が如何なる力を以て作用するかを述べ得るならば、吾人は斯學の假說的取扱に對するものとしての實證的取扱に對する一切の反駁を除去し得べく、然もかゝる場合は屢〻存すべきであると、（Four Introductory Lectures. Lecture IV）

シイニオアの修正は正當である。然もその故に經濟學の假說性は否定せられ得ない。それは彼自らが言へる如く、事物自然の狀態に關する理論である。特殊的事情の看過と、妨碍原因の缺如とを（そを知り得ざる事多し）條件として、成立せる理論である。その假說性は免るべからざるものである。ミルと雖も「そが經濟學の必然採るべき型式なるが故にのみ」「人間の行動を以て富の願望のみより生ずるものと看做す」に過ぎない。孰れにしても眞に現實的ならざる經濟學を、一は假說的と稱し、他は一定の條件の下に現實的なりと云ふにすぎない。然し乍ら、この言葉の差違が、經濟理論の妥當性に對する兩者信賴の度合を、表示するは免れ難い。ミルに比してシイニオアは、その理論と現實との間隔の遙に狹少なるを信じつゝ「經濟學は富の性質、生產及び分配を論ずるの科學なり」と定義したのである。

然るに後年即ち Report of the British Association for the Advancement of Science, Oxford, June & July 1860. に於て多少修正を加へられたる定義を見出す。之に依れば「經濟學は富の生產及分配を律する諸法則を、それ等が人心の活動に依存する限りに於て敍述する科學と定義せらるゝを可とすべし」と。或は又、經濟學者は、富の生產又は分配に影響する限りを除き他の物質科學又は精神科學に携る事なしと。（ibid. p. 182-3）之等に依つて看るに、修正は「富の性質」を削除せる事と、「それ等が人心の活動に依存する限りに於て」を添加せるの二事である。何故に「富の性質」を論ずる事を削

除せるか。又、何故に「人心の活動云々」を添加せるか。之に對する確答は該レポートの全文を有せざる私の爲し得ざる處である。たゞ後者に就ては、ミルの影響を認むるも、必ずしも不可ならざるべきを思ふのみ。

（四）

ジョン・スチュアート・ミルの經濟學方法論は先づ一八三一年十月 On the definition of political economy and on the method of investigation proper to it に現れ、後に精神科學一般の方法論として「論理學體系」中に表明された。兩者の間には議論の精疎の外に、方法そのものに就いて見解の相違か存する。

先づ私は前著に就いて述べる。

前著はその表題の示す如く經濟學の定義と方法の二問題を論じてゐる。何故二問題を論じたかといへば「學の定義の考察と、之が哲學的方法の考察とは、不可分に連絡してゐる」からである（Early Essays by J. S. Mill, Bohn's Library. 1897. p. 136.）「自傳」の傳ふる處に依れば、ミルの論理學研究は一八二四五年の頃より始められ、一八三〇年の初めには、自己の論理學的思索を書き誌すまでに至り、更らに一八三一年には後に「論理學體系」第二編となるべき三段論法の理論を解決してゐる（Autobiogropiy, 1837. p. 122. p. 158-161. p. 180-182）「經濟學の定義及び方法」は正にこの時に草せられたのである。この時までに、ミルは社會現象に就いて一の重要なる結論に達して居た。それは社會現象は諸原因の合成的結果だといふ事である。元來ミルの論理學的思索は名辭の差別及命題の意味に就いての研究に始り、次いで歸納の問題の解決に努め、推理の問題は後廻にされた。これは先づ前提を獲得して置かなければ、それから推理をする事が出來ないからであつた。歸納とは主として結果の原因を發見する方法である。自然科學に於て因果を究明する方法を會得しようと企てゝゐる間に、彼は比較的完全な科學に於ては、吾々は特殊からの概括に依つて個々に考へられたる諸原因の傾向に遡り然る後、これ等個々の傾向から、同一諸原因の結合の結果を推理する事を知つた。そこで彼は自問した「この演繹過程の究極的分析は何であるか」と。通常の三段論法の理論は明かに之に對して何等の光明をも投じないので、彼は一つの例を、即ち、力學に於ける力の合成を採り、これを解く際に精神が如何なる作用をなすかを考へた。そしてその場合、精神は單なる加算を行ふに過ぎないことを知つた。即ち一の力の結果に他の結果を加へ、これ等諸結果の合計を以て合成的結果だとするに過ぎない事を知つた。然も此の如き方法は力學又は物理學の數學的部門に對しては正當であるが、化學に對しては正當でない。この事は科學が、その取扱ふ分野に於て、數個の原因の結合的結果と同一諸原因個々の生ずる結果の合計とが等しいか否かに依つて、或は演繹的となり、或は實驗的となるものであることをミルに敎へた。この結論はミルの方法論的思想に重要な意義を有する。總ての社會科學、從つて經濟學を演繹的科學なりと主張する重要なる論據が、こゝに置かれてゐるからである。洵にミルは演繹的方法を既に理解した。併しこゝで行塞つた。歸納法に就いて充分な筆を把り得なかつたからである。爾後五ヶ年間彼は論理學の論述を中止せねばならなかつた。「經濟學の定義及方法」はかくの時に成つたのである。

經濟學の定義に就いてのミルの見解を覗ふ。議論の順序としてスミス、及びジイムス・ミル等の見解が批評される。スミスの意見はミルに依れば術と科學との混同を免れないものである。本來科學とは眞理の集合體であり、術とは準則の一體である。科學は現象を認識し、その法則を發見せんと努める。之に對し術は目的を示し、これを成就するの手段を探究するものである。故に若し經濟學にして科學ならばそれは準則の集合體であつてはならない。從つて一國の富を增進する爲めの準則は、科學に非ずして科學の成果である。又、ジェイムズ・ミルは經濟學を定義して「富の生產・分配及び消費を支配する法則を敎ふるものである」と述べてゐる。この定義だけに就いては、スミスに對する如き批難を加へ得ない。それは經濟學が科學にして、術に非ざるを示してゐる。然るに之に對して「經濟學が國家に對するは、家政學が家族に對するに等しい」との解說が加へられてゐる。これでは經濟學概念を全く弛緩せしめ、再び術をその中に浸入せしめる事になる。之等に對して、ミル自身が擧示する定義は、次の如く長いものである。曰く「富の生產の爲めにする人類の協同的活動より生ずる如き諸現象の法則をば、これ等の現象が何等か他の目的の追求に依つて變更されざる限りに於て、探究する科學」と。(ibid. p. 135)

この定義を解說するに先づ「人類の協同的活動」とは何であるか。抑經濟學は總ての狀態に於ける人類を論ぜずして、社會狀態に在る人類のみを論ずる。即ち、個々の人間が人間の團體の一部を形成し、共通の目的に向つて組織的に協同する狀態に在る人間のみを論ずる。「人類の協同的活動」とはかゝる社會狀態に在る人間の活動の謂である。この事は直ちに經濟學をして政治科學(Science of Politics)の一部たらしむるものである。

併し「人類の協同的活動」の全部が經濟學の對象となるのではない。「富の生產の爲めにする」ものに限る。然らば富とは何ぞや。曰く「有用又は快適なるものにして交換價値を有する總てのもの、換言すれば、勞働又は犧牲を拂はずして、所要なる數量を取得し得るものを除き、總ての有用又は快適なるもの」と(Mill. Principles of Political Economy, preliminary remarks) 交換價値を有するか否かを以て、富なる財と富ならざる財とを分つ事は、ミルの創始ではない。例へばシイニオアもさうである。然も兩著共に、何故自由財が經濟學の對象たる事から斥けらるゝかを說明しない。蓋し正統學の傳習である。スミス以來正統學派の人々が論じたものは、概ね交換價値を有する財であつた。價格經濟を論ずるにはかゝる態度は便宜であり、私有財產制の下にあつては合理であつたと云はねばならぬ。孰れにせよ、這個の意味に解されたる富の生產の爲めにする、人類の協同的活動の現象の法則を經濟學は論ずる。併し乍ら、人類の行動は種々なる動機より發すると共に、諸般の行動は錯綜し衝突し加重し、從つて「生產の爲めにする行動なるものを、況んやその現象の法則なるものを、指摘する事は頗る困難にして、不可能に庶幾い。茲に於てかミルは「これ等の現象が、何等か他の目的の追求に依つて變更されざる限りに於て」との條件を設ける。この條件に依つて經濟學は假說的科學となる。

抑經濟學が考察する人間は、富を所有せんと希ひ、且つこの目的を達成する諸手段の比較的有效性を、能く判斷する人間である。然も富への願望以外の凡ゆる人間的欲情と動機とは之を全く抽象

して了ふ。但し勞働嫌惡と費用高き快樂の現在享樂の願望とは、富の願望に對する永續的反對原理として、考慮の裡に入れられる。約言すれば、經濟學は人類を以て、偏ら富の取得と消費に沒頭するものと看做すのである。固より如何なる經濟學者と雖も、實際に人間が此の如くに造られてゐると想像するのではないが、これが斯學の必然に採るべき態樣だからである。人間の生活には、富の取得が主要なる目的となる部分と、然らざる部分とがある。經濟學の對象たるは正に前者の部分である。然もその場合、經濟學は主たる目的を、恰も唯一の目的たるかの如くに取扱ふのである。それ故に經濟學は假說的科學たらざるを得ない。然もその假說たるや、全く事實に基礎を置かざる事もあり得べく、又普遍的に事實に一致するを主張する事なきものである。從つて經濟學の結論は、幾何學の結論の如く、抽象に於て眞たるに過ぎない。即ちそれ等は一定の想定の下に眞たるに過ぎないのである(Essays. p. 133-137)

同書の別處に於てミルは亦次の如く定義して曰ふ。「富の生產及び分配を、それ等が人性の法則に依存する限りに於て論ずる科學」又は「富の生產及び分配の精神的又は心理的法則に關する科學」と(ibid. p. 128)玆に謂ふ「人性の法則に依存する限り」又は「精神的又は心理的法則に關する」といふのは如何なる意味であるか。

ミルに從へば、人智の全野は自然科學と精神科學に分たれる。自然科學とは、物及び一切の複雜な現象を、物の法則に依存する限りに於て論ずる學であり、精神科學とは、精神及び一切の複雜な現象を、心意の法則に依存する限りに於て論ずるの學である。兩者の區別は、各々が關與する對象物に存せずして、對象を取扱ふ範圍の差より生ずるといはねばならぬ。何故ならば、最も單純なる場合には、區別は對象物が違ふ事に存する、即ち、一は物を一は精神を對象とするに存するが、多少複雜な場合には、例へば政治學の如き場合には、這個の區別は用を爲さぬからである。然も心意の法則と物の法則とは頗る相似ないものであるが故に、兩者の法則を同一研究の異部分となし得ない。故に物心兩者の屬性に依存する複雜なる一現象は、二個の全く別個の科學の對象となる。即ちその一は、その現象が物の法則に依存する限りに於てこれを取扱ひ、他の一は、心意の法則に依存する限りに於て之を論ずる。

然も精神科學の大多數は、自然科學を豫想するが、自然科學は殆んど精神科學を豫想しない。これは物的現象には、心意の法則に全然依存しないものが多いが、精神的現象にして、心意の法則にのみ依存するはなく、心意そのものゝ現象でさへ、一部分は肉體の生理的法則に依存するからである。故に總ての精神科學は、多種多樣なる物的眞理を考慮の裡に入れなければならぬ。

這般の立脚地より看る時、富を構成する對象の生產の法則は、經濟學並びに總ての自然科學の兩者の主題であるが、然もそれ等の法則中、純粹なる物の法則は自然科學に屬し、人心の法則は經濟學に屬する。換言すれば、經濟學は物の生產及び分配に關與する心意の現象如何を研究する。前述の定義は正にかゝる考慮の結果與へられたのである(Essays. p. 125-128)

併し最初の定義と後の二定義との間には、一の著るしい差違がある。それは「分配」なる概念の有無である。然もミル自らが「完全なる如くである」と稱した前者の定義に於て、之が缺けてゐる。ジェ

イムズ・ボナーは之を說明して「惟ふにこれは Political Economy に於て、分配の法則は自然及び人間性の確定的條件に依つて決定せられずして、全然人間の制度のそれに依つて決定せられるのであると云つた論據に基いたものであらふ」と述べてゐる (J. Bonar. Philosophy and Political Economy p. 224)

經濟學を這般の如く概念する事には、幾多の批難が存し得る樣に思ふ。就中、之を以て心理的科學と考ふる如きは、最も大いなる弱點たるの觀がある。キインズは曰く「ミルは經濟學を定義して、富の生産及分配の心理的法則に關する科學と云ふ。併し乍らミル自らがその Principles of Political Economy に於て作れる次の如き諸法則を採りてみよ＝地代は農産物の生産費中に入らず＝貨幣の價値は、他の事情にして等しければ、その數量と流通速度とに依存する—總ての貨物に對する租稅は利潤の上に懸る。此の如き諸法則は、たとへ究極は心理的基礎に基く事が許されるとしても、精神的又は心理的のものと稱すべからざるものである」と (Keynes. Scope and Method of Pol. Eco. p. 90)

然も「人性の學」なる觀念は洵に英國の舊き傳統である。往時に於ける倫理的及び政治的科學の研究者達は彼等の問題の解決を人間性の直接原理に求めた。ホッブスに從へば、倫理科學は感覺及び想像にその動機を有する心意の運動を取扱ふものである。又ジョン・ロックはその「人間悟性論」の卷末に於て科學を三つに分ち、第一はフィジカ即ち自然哲學第二はプラクチカ、就中最も重要なるものは倫理學第三はロジカ即ち論理學とした。ヒュームに依れば、凡ゆる科學は人間性に對して一定の關係を有するものである。數學・物理學・自然宗教の如きすら、幾分人間の科學に屬するものである。論理・倫理・批判及び政治の四科學に至つては、人間性との連結は極めて密接なるは言を俟たぬ。然らば吾人がその哲學的研究に於て成功し得べき唯一の道は、端的に是等諸科學の首都、即ち中心たる人間性そのものは向つて殺到する事である。かくて凡ゆる人知の基礎は、人間性の研究に依りて發見せらる可きものであるとの結論に到達した（高橋誠一郎、經濟學史七—八頁）又、アダム・スミスの經濟學は分勞の事實に出發するものであるが、その分勞は結局交易性向に歸せられた、惟り分勞のみではない。スミス自ら明言せる如く、恒久不變なる人間性こそ社會哲學の根本原理である。經濟生活の中樞的原理は自利心であり、倫理學のそれは同情であつた。リカアドオ及びミルの哲學上の師たるベンサムも亦、快樂を欲し苦痛を避けむとする人間の本性をその政治學倫理學の基礎とした。

かくの如き傳統は亦ミルをして、總ての社會現象を以て外界の諸事情が人間の集團に及ぼす活動に依つて生じたる人性現象と觀ぜしめた。社會科學とは社會に於ける人間の科學である。人類の集團と社會生活を構成する種々なる現象との科學である。從つてかゝる科學の可能性は人性法則の可能性に基く、人性法則の可能性は懸つて「人間行動の必然性」如何に存する、ミルはこの「必然性」を「宿命的必至的」と解するを斥け「吾人が一切の人間行動が必然的に生ずるといふ時、吾人は何等之を妨ぐるものがなければ、一定の行動が確實に發生すべしと云ふ意味にすぎない」と解して、之を肯定する。換言すれば人間の諸行動の間に、因果關係（法則性）の存在する事が認められる。然もミルに從へば、不變の法則に從つて相互に生ずる事實は、總て科學の對象たり得るものである。かくて

人間行動に關する因果法則は、當然科學の內容を爲し得るものであり、從つて社會科學は當然に可能なのである（Mill. System of Lojic. Bk. VI. Chap. VI, Chap. III. Chap. I etc.）

併し乍ら社會科學は精密科學ではない。精密科學となるが爲めには、當該對象の一般的徑路のみならず、特殊徑路も亦說明され、且つその原因に關聯せしめられなければならぬ。然るに社會科學は總ての場合に、且つ相當な程度に、當該現象に影響する諸原因の法則から成るにすぎない。人性の科學が携る現象は、人間の思惟・感情・行動である。然るに個人の行動は所謂科學的精確さを以て斷定し得ない。これはその個人が置かれるべき事情の全部を豫め觀るを得ないからであると共に、亦、一定の環境の下に於ても、人が如何に思惟し感じ、行動するかを、精確且つ普遍的に確定し得ないからである。これは各人の思惟・感情・行動の態樣が或る原因に基かないからではない。亦、吾人の材料が完全なる場合にも、尙心的現象を決定する法則を充分に知り、以て人間の行爲又は感情を可成り精確に斷言し得る事を疑ふからでもない。それは人間の印象と行爲とは、單に人の現在環境の成果たるのみならず、此等の環境と個々人の性格の成果だからである。然も人間の性格を決定する要素は頗る多數多樣である。故にたとへ人間の科學は理論的には完全でも、與件が總て與へられず、亦種々なる場合に精確に同一でないから、積極的豫言を作り、又は普遍的命題を設定し得ないのである。併し乍ら、他面に於て、這般の諸成果の多くは、部分的原因の全部を一括せるものよりも、一般的な諸原因に依つて決定される事が大である。即ち主として全人類、少くとも人類の大部分に共通なる事情及び屬性に左右される。從つて殆んど常に眞なる一般的命題を設定する事は、常に可能である。然も社會的問題に於ては、近接的概括が實際的目的に對しては精確なるものに等しい。任意に選べる個人に就いて蓋然的なるものも、集團の性質と行爲に就いては確實であると。そしてミルは政治的及び社會的科學にとつては、之で充分であるといふ。けれどもこれに純粹なる科學的性質を與へむが爲めには、這個の近接的概括—それ自身は最低級なる經驗的法則—が、その依つて生ずる自然の法則に、演繹的に結合されなければならぬ。即ち該現象の依存する諸原因の特性に分解されなければならぬ。換言すれば、人性の科學はその近接的眞理が、その依存する人性の普遍的法則よりの系として表明せられ得るに伴つて、存在すると言ひ得べきであると（Mill. ibid. Bk. VI. Chap. II, III.）

社會科學に二種ある。一は前提されたる一定の社會狀態の下に於て、一定原因が如何なる結果を生ずべきやを論ずるもの即ち特殊的社會科學であり、他はこの前提されたる社會狀態そのものゝ決定法則を論ずる處の、一般的社會科學、即ち一般社會學である（Mill. ibid. Bk. VI. Chap. X）經濟學は前者に屬する。

凡そ經濟學を研究するものが採用する方法は二種に大別される。一は歸納的方法であり、他は演繹的方法である。ミルに從へば特殊的社會科學の方法として前者は無效にして、必ず後者に依賴しなければならないと云ふ。何故であるか。

歸納的方法とは先づ特殊經驗を要求し、全く特殊事實から上つて一般結論に達するものであり、亦アポステリオリ方法とも呼ばれる。それは結論の基礎として特殊經驗を要求する。然るに、殆んど

總ての精神科學に通有なる特性にして、然も之に依りて精神科學が多くの物的科學と區別されるところのものがある。それは實驗の不可能である。その結果、吾等が精神科學に於て利用し得るのは、いはゞ自然に發生してくる少數の實驗に過ぎない。これに對して吾々は豫め準備をする事も出來ず、亦、之を自由に處理する事も出來ない。然もそれ等の所謂自生的實驗は、頗る複雜なる且つ完全には知り得ざる環境の中に發生し、過程の大なる部分が觀察を逸脱するのである。この歸納資料に於ける不可避の缺陷の故に、吾等はベーコンの謂ふ決裁的實驗を取得し得る事が稀であると(Mill. ibid. p. 142.)社會科學に於ける實驗的方法無用の論は「論理學體系」に於いても說かれてゐる。曰く「社會現象の法則に實驗的方法を用ゐんとする企圖に於て、吾人は先づ人爲的實驗の不可能に當面する。だとへこれを爲したりとするも、非常なる不利益の下に爲さゞるを得ない。各個の場合の諸事實を確知し記錄する事が不可能なるのみならず、實驗の結果を確知する以前に、事情に重大なる變化の起らざるは稀である。從つて吾人は自然が作れるものを看視し得るに過ぎない」と。即ち先づ最も完全なる歸納法たる差異法を用ゐんとすれば、或一點に於てのみ異り、他の諸點は全然同一なる二例を發見する事は不可能である。かゝる事を假定するさへ著るしく不合理である。故にこの方法は用ゐ得ない。間接的差異法も亦不確實である。何故ならば、一の社會的結果は、必ずしも一原因の所產ではないからである。一致法は社會現象の如く、原因の多樣が最高度に行はれてゐるものに對しては、殆んど無價値である。第一に斯方法の要求する條件に適合する樣な實例を、確知する事が既に不可能であり、且つある政治現象の原因を單一なりと假說することは余りに事實と隔絕する。共變法に對しても同樣な反駁が向けられた。最後に來るものは剩餘法であるが、斯方法はたゞ一つの當該對象を精確に注視すればよいのであるから、前記の諸方法より優れてゐる如くである。けれども斯方法は本來、純粹なる觀察と實驗の方法ではない。それは諸事例を比較から結論するのでなくして、或事例と既往の演繹の結果との比較から結論する。それは社會現象に適用される場合、その結果の一部が依つて生じたる原因が既知なる事を豫想する。然もその原因たる、特殊經驗に依つて知られずして、人性の諸原理からの演繹に依つてのみ知られるのであると。(Mill. System of Logic. Bk. VI. Chap. VII) 同一の思想は「論理學體系」出版の十二三年前、即ち既に一八三〇年の頃ミルの腦裡に在つたものゝ如くである。その頃、行はれたるマコウレイと父ミルとの論爭を評して「マコウレイは政治學に於ける哲學化の方法を、純粹に實驗的な化學の方法と同一視したに於て誤つてゐる」と述べてゐる。(Mill. Autobiography. 1873. p. 15)

アポステリオリ方法に對して、演繹法とは特定の事實から出發して、論ぜらるゝ問題の範圍よりも遙に大いなる範圍を抱有する一般的原理に到達し、然る後その一般的原理から下つて、多種多樣なる特殊的結論へ論を進める。それは歸納と推理の混合的方法である。亦アプリオリ方法とも呼ばれる。換言すれば、それは想定されたる假說から推理する(Mill. Essays. p. 137. p. 138.)

アプリオリ方法は更に二種に分れる。先づ前記實驗的方法の正反對を行くものは、抽象的方法である。この方法は社會現象をば、人間の本性から演繹的に研究しようと試みるものである。從つてその意圖は正しく正鵠を得てゐるのであるが、社會科學の特性に關する考察が不充分であるが爲め

に、社會科學を幾何學に近いものと考へる。これは大いなる誤謬と云はねばならぬ。幾何學に於ては一原理から生ずる結果と他の原理から生ずる結果とは衝突しない。一度眞なりと證明されたものは、總ての場合に眞である。故に幾何學に於ては、例へば力學に於いて絶えず起る力の衝突、即ち相互に相殺し修正し合ふ諸原因の存在を承認する余地がない。從つて幾何學的社會理論は各個の社會現象が常に單一なる力、即ち人性の一特性から生ずると想像するものゝ如くである。社會現象の本質がかくの如きものに非ざるは言を俟たぬ。人性の諸性質の全部が社會現象に影響するのである。かくて社會現象に幾何學的方法を用ゐる事の誤謬は、反對力の作用を看過するに存する(Mill. Logic. Bk. VI. Chap. VIII.) 前記マコッレイ對父ミルの論爭に對し父ミルを評して曰く「父が演繹的方法を採つたのは正しいが、演繹の標本として、適當なる方法、即ち、物理學の演繹的分科に屬する方法を採らないで、不適當な方法即ち純粹幾何學的方法を採つた事が間違つてゐる」と(Autobiography. p. 161) ジエレミー・ベンサムも亦幾何學的方法を用ゐたる一人と看做される(Logic. p. 580-583)

殘る唯一の方法は具體的演繹法である。既述の如く、社會現象に於ける諸原因の結合は所謂「原因の合成」である。故に之に依つて生じたる結果は、諸原因個々の結果の合計に等しい。社會現象に於ける事情の複雜さは、法則自身の數が多い事から生じないで、與件が特別に多數であり多樣であることから生ずる。即ち、小數の法則に從つて該結果を作るに共力する要因が、多樣であり多數であることから生ずる。故に、社會科學は演繹的科學ではあるが、それは幾何學と同類型ではなく、より複雜な自然科學に類似する。それは該結果の依存する諸の原因よりして各結果の法則を推理するが、幾何學的方法に於けるが如く、單に一原因の法則よりせずして、相合して結果に影響を及ぼせる原因の全部を考察し、且つこれ等の法則を相互に調和せしめることに依つて、之を爲すのである。この方法をミルは具體的演繹法と稱する(Mill. Loigic. p. 578-584) 此の方法は單に特殊的社會科學の方法たるのみならず、亦唯一の方法である。ミルは曰く「アプリオリ方法は社會科學の如何なる部門に於ても、由つて以て眞理を取得すべき唯一の方法である」と(Mill. Essays. p. 139)

既に假說より出發する以上、經濟學は既述の如く抽象的科學である。從つて斯學の原理が特定の場合に適用されるに當つては、その場合個々の事情の全部を酌酌せねばならぬ。管に該抽象科學に依つて考慮される事情に適合する事情のみならず、他の事情即ち同種の場合に共通ならざるが爲めに、斯學の認識を逸したる諸事情をも檢さねばならぬ。この後者の事情を妨碍原因と云ふ。これあるが爲めに經濟學の不確實は生ずる。否、諸道德科學一般の不確實はこれより生ずる。然も妨碍原因がそれ自らの法則を有するは、恰もこれらに依つて妨碍される原因がそれ自らの法則を有するに等しい。而してこの妨碍の原因の法則よりして妨碍の性質と量とをアプリオリに豫示することが出來る。洵に妨碍原因なるものは、實は妨碍せられる原因、そのものと協力せるものと云はるべきである。かくて特別なる原因の影響は、一般的なる原因の影響に、或は加へられ、或はこれより控除されなければならぬ。然るに妨碍原因には經濟學が關與する人性原理、即ち富の願望を通じて作用するものと、他の人性原理を通じて作用するものとある。前者は勿論經濟學者の領分に屬するが、後者はその外に在るものである。前者を考慮することは、抽象經濟學の方法を一層細かく追隨することで

ある。その假說に對し、新鮮にして一層複雜なる事情を加へることであり、少くとも抽象經濟學に補助的理論を加へることである(Mill. ibid. p. 146)

然るにこゝに一の困難がある、元來、ミルの立場よりすれば、社會的狀態に在る人間の感情と行動とは、全く心理的及び性格學的法則に支配される。何等かの原因が如何なる影響を社會現象に及ぼすにせよ、それは這個の法則を通じて行はれる。故に人間の行動と感情とが充分に知り得られるならば、這般の諸法則よりして、一個の原因が生ずるの傾向ある社會的影響の性質を決定することは、特に難事ではないのであるが、之と異り、數個の傾向を結合し、多數の共存的原因の綜合的結果を論ずる場合には、吾人はその場合に存し得べき全原因の影響を秤量し結合せざるを得ない。これは人間の能力の及ばないことであると云はねばならぬ。茲に於てか社會現象の如き最も複雜なる現象に適用される時、演繹的方法の缺陷は、最も痛切に感じられざるを得ない。然るに之を救ふべき道が一つある。それは檢證である(Mill. Lagic. p. 584)

ミルの演繹法理論に依れば、演繹法は直接的歸納、演繹推理及び檢證の三段階より成る。凡そ演繹法の問題は、相合して一結果を產出する種々なる傾向の法則から、該結果の法則を發見することである。故に第一要件はこれ等諸傾向の法則を知ることである。即ち併合的諸原因各個の法則を知る事である。これが爲めには、豫め各原因個々に關する觀察又は實驗の過程がなければならぬ。若しくは之に先だつ演繹がなければならぬ。そしてこの演繹も亦その終局前提の爲めに、觀察又は實驗に賴らざるを得ない。第二要件は一定の諸原因の結合から、如何なる結果が生ずべきかを、該諸原因の法則から決定することである。即ち、演繹推理を行ふことである。かゝる演繹推理に依つて、或程度まで、吾々は、一定の原因結合から如何なる結果が生ずべきか、又如何なる原因結合が或一定の結果を生ずべきやの問に答へることが出來る。けれどもこの第二段階までゞは、その結論に多くの疑が持たれ得る。この疑問の余地なからしむるものが檢證であり、これが演繹法の第三段階を爲すのである(Mill. Logic. p. 299-303)然らばそれは如何にして爲されるのであるか。

それは推理の結論を具體的現象それ自體と、若しくはそれ等の具體的現象の經驗的法則と、照合することに依つて爲される。兩者が一致する時、その推論の結論は信賴するに足るものとなる。故に、具體的演繹法に於ける確信の基礎は、アプリオリ推理それ自身でなく、この推理の結果とアポステリオリ觀察との符合である。茲に於てか、社會科學の眞理に到達するの手段としては斥けられたるアポステリオリ方法、即ち、特殊的經驗の方法は、今や眞理を檢證する手段として、大いなる價値を有するに至るのである(Mill. Logic. p. 585)

洵に具體的演繹法は社會現象の有力なる研究法と看做された。否「經濟學の定義及方法」に於てはそれは唯一の方法であると主張された。然るに「論理學體系」に至つて、社會學的問題のうちには、その異常なる複雜さの爲めに、この方法を用ひ得ないものがあり、之に對して逆演繹法を適用すべきことが認められるに至つた。これは正にコントに負ふ處のものである。

ミルがコントの「實證哲學大系」を初めて讀んだのは一八三七年の終であつた(Mill. Autobiography. 1873. p. 209) ミルはコントから受けた影響に就いて次の如く言ふ「余はコントから獲たところ

が多く、それに依りて私の章「論理學體系の」を豐富にすることが出來た。そして彼の書物はその後考へなければならなかつた部分の或る處には、缺くべからざるものであつた、彼の著書の續卷が續いて出た時、余はそれを貪り讀んだ、しかし彼が社會上の問題に達した時には、色々入交つた感じを以て讀んだ。第四卷には失望した。しかし歷史に關する一貫した見解を含むでゐる第五卷は再び余の熱情を燃えたゝせた。第六卷に至つても、大して下火にはならなかつた」と。（ibid. p. 211）一八四三年「論理學體系」初版に於ても、ミルはコントを以て「科學の方法一般に關する現存する最大なる權威者」と言ふを憚らなかつた（Bain. John Stuart Mill. p. 73）けれども嚴格に論理學の範圍に就いて言へば、ミルが、コントに負ふ處は「歷史及び統計の紛糾した題目に主として適用されるものとしての逆演繹法の概念である」（Mill. Autobiography. p. 210）通常の演繹法は一般推理に依つて結論に到達し、次にそれを特殊經驗に照らして檢證するのであるが、逆演繹法に於ては、先づ特殊經驗の對照校合によつてその一般法則を取得し、次にそれが既知の一般原理から出てくる處のものに一致するか否かを確めて檢證するのである。

ミルは社會科學的研究を二種に分つ。一は前提されたる一定の社會狀態の下に於て、一定原因が如何なる結果を生ずべきやを論ずる特殊的社會學であり、他はこの前提されたる社會狀態そのものゝ決定法則を論ずる一般社會學である、具體的演繹法は前者に、逆演繹法は後者に適用される。

凡そ一の社會狀態の直接原因は該社會狀態に直ちに先行する社會狀態である。故に一般社會學の根本問題は社會狀態の繼起が從ふの法則を發見することである。それ故に逆演繹法は歷史の一般的事實を研究し分析し、以て進歩の法則を發見せんとする方法である。然も單なる事實の分析より得る法則は、經驗的法則に過ぎない。故にその法則はその基礎をなす心理的及び性格學的法則に、アプリオリ演繹に依つて結合されなければならない。そして始めて眞正なる科學の法則となるのである。かくて歷史は經驗的社會を供與し、一般社會學は之を確知し、之を人性の法則と結合し、演繹法に依つて、這般の法則が窮局的なる人性法則の結果たる派生的法則なることを明にするを以てその本務とする。

ミル自らも認めたる如く、彼がコントに負へるは逆演繹法のみと言へるは、單に論理學の範圍に限られる。その受けたる影響は更に廣汎に渉る。

サンシモンの秘書たりしコントが二十年の心血を注げる「實證哲學」は一八三九年から四〇年に亘つて出版された。彼に從へば吾人は現象以外に何物をも知ることが出來ない。而して吾人が是れ等のものに關して有する知識は相對的であつて、絶對的ではない。吾人は一定の事實が產出せしめらるゝ本質も眞の體樣をも知ることがない。吾人は單に事實相互の連續又は類同の關係のみを知る。是れ等の關係は不變である、換言すれば同一事情の下に在つては常に同一である。諸現象を結束する恒久の類似、及び、先件並びに結果の名の下に、是等のものを結合する不變の連續は、その法則と稱せらるゝ所のものである。現象の諸法則は吾人が彼等を知ることの出來る總てゞある。かくコントは敎へる。又、コントは科學の分類を行ふに當り、經濟現象を以て他の社會的事實と交錯する

こと極めて大であつて、之に關して別個の科學を作る事は不可能であると觀た。かくて彼は總括的社會科學即ち社會學を創設せんとした。經濟學は數學・星學・物理學・化學・及び生物學と竝んで、その一部たるに過ぎないのである。かくコントは考へた。又コントは「實證哲學」第四卷に於て、社會學的方法を述ぶるに當つて、社會靜學と社會動學を區別した。前者は社會的共在の法則を取扱ふものであり、後者は社會的發達の法則を研究するものである。社會靜學に對する適當なる方法は直接觀察の方法であり、社會動學に對して適當なるは比較の方法であつて、惟り歴史の助けに依つてのみ遂行せられ得るものである。社會的研究は人類中に在つて最良なるものゝ現今に至る迄の普遍的發達の健全なる分析に基礎を有せねばならぬと、（高橋誠一郎、經濟原論、序編、五五二―五五六頁）

先づミルは社會の靜態と動態との兩者を取扱ふ社會學に關する思想に打たれた。そして彼も亦經濟靜學及び經濟動學なるものを區別を行つた。併し乍らミルの言ふ靜學及び動學といふ概念はコントのそれとは趣を異にする。それは共在と發達との法則を意味せずして、「平衡の理論」と「運動の理論」とを意味するのであることを注意せねばならぬ。又、社會現象の普遍的關聯はその如何なる部分をも他のものより獨立のものと稱する能はずとのコントの見解をミルは承認したけれども、然もミルは經濟學の存在を主張した「社會活動の如何なる部分に發生する事柄でも、盡く社會現象の普遍的一致（コンセンナス）に依つて、必ず凡ゆる他の部分に影響を及ぼすものであり、又、一の社會に於ける文明及び社會的進歩の一般狀態は部分的現象に至大の勢力を有するものである。併し乍らそれにも拘らず、各種の社會的事實は先づ直接には各異種の原因に主として依存するものである事も等しく眞である。

從つてそれ等の事實は別々に研究せられる事が、當に有利なるのみならず、亦、さうあらねばならぬ。例へば社會現象の大いなる一種にして、富の願望を通じて作用する原因が主として直接的原因たるものがある。これに主として關聯ある心理的法則は、少なる利得よりも大なる利得が好まれるとの周知の法則である。……かくて經濟學なる名稱を受くる一科學が建設せらるべきである」と。（Logic. p. 588）從つてコントの如く經濟學を以て、最早單なる障碍物となり終れる舊制度の產業政策を、不信ならしむるの過渡的任務を有するに過ぎないものとはみなかつた。そして次の書簡をコントに送つてゐる「余は現在の經濟學に關する貴下の意見を知悉してゐる。余はそれに就いて貴下が有せらるゝよりも優れたる見解を有してゐる。併し若し余がその主題に關する一書を書いたにしても、それは決してその（經濟學）總ての具體的結論の純粹に一時的な性質を忘れたからではない。余は生產の一般的法則と分配及び交換の原理とを分離せしむるに特に力を入れるであらう。前者は總ての產業社會に必ず共通なものであるに對し、後者は必然に特定の社會狀態を前提とし、然もこの社會狀態が無限に繼續すべしとも、亦繼續し得るとも考へないものである……余はかゝる書物が、特に英蘭に於て、一時的な效用を有するものであり、亦實證的精神を政治的論議の中に誘入せしむるに資する處大なるべきを信ずるものである」と（一〇四四年四月三日附書面）こゝにミルが「經濟學の具體的結論の一時的性質」と言ふのは「現在の私有財產性が繼續する限り」といふ意味である。然るにコントはこれを自己の意味に、即ち「實證的社會學が建設されるまで」との意味にとり、ミルの書くべき書が實證的精神の普及に大いに貢獻すべきを祝福し返書を送つて言ふ「正當なる意味に於

ける經濟的分析は余の意見によれば、社會學的分析の一般組織から分離しては行ふべきものでないが、併し余は此の種の現在の形而上學「コント現在の○○を以て形而上學とみた」の一時的效果を認めることを拒むものでない」と。ミルも亦勘違ひをしてこの書を讀んで喜び、返書を送つて彼がコントの同意を得たることは、コントが彼の計畫を「非科學的」と考へはしないかとの惧を有してゐたが故に、非常な喜びであることを申送つた「若し余が產業的現象に關する理論の純粹に一時的な性質を樹立する爲めに可能的最大の注意を拂はないとしたならば、正しく非科學的と考へられたであらう」と、（一八四四年六月六日書簡）コントは再び書簡を以て彼がミルの企畫を結構なものと考へる旨を答へてゐる「經濟學は、一般的な歷史的見解に依つて附與されたる純粹なる豫備的目的及一時的任務を有するものと看做され、これが爲めにその主要なる危險を免れ、頗る有用なるものとなるであらう」と。（一八四四年七月二二日付書簡）かくの如く私有財產と相續を不可壞の事實と做し、生產と交易の自由を社會的進步の終局的警語として想定する舊經濟學を以て一時的のものと考へることは、ミル自らの言に依れば、サンシモン學徒の影響に依るものである（Autobiography. p. 167）

かくの如き方法論は如何なる批評を受くるものであるか。正統學派の方法論一般に對して與へらるゝ批評の多くが、ミルに適用され得ることは言を俟たぬ。從つてこれは姑く措き、特にミルに向けられたるものを求むるに、その論理學一般に對するものは、數多きに比し、その經濟學方法論に對するものは割合に少い樣に見受けられる。私はその三四を擧げて本稿の筆を擱きたいと思ふ。

先づヘネーの所說を見るに「經濟學未定問題」第五論文に於ける「アプリオリ方法」と「論理學體系」に於ける「具體的演繹法」とが別個のものであるかの如く述べられてゐる。即ち、當初アプリオリ方法のみを信じてゐたミルが「コント、マコウレイ、化學研究の影響に依つて舊方法が危險であることを信じ、そして彼が具體的演繹法と名けたる、歸納と演繹との結合せるものを主張するに至つた」と（Haney. History of Economic Thought. p. 432）。ジェイムズ・ボーナーも亦同樣の意見を有する如くである。曰く『未定問題』を書いた時には、ミルはアプリオリ方法が社會科學一般並びにその經濟的部門に於ける唯一の正當なる研究法であるとの意見を有した。コントは彼に彼の誤謬を知らしめた。そして『論理』學に於ては他の部門に於ける社會科學の方法を、具體的演繹法として記述する」と（J. Bonar. Philosophy and Political Economy p. 243）這般の批評は三點に分つて檢せらるべきである。一はアプリオリ方法と具體的演繹法とが別のものであるか否か。二は經濟學が具體的演繹法の適用の例外をなすものなりや。三は、具體的演繹法の承認がコントの影響に歸せらるべきものなりや、之である、先づ第三の點を考へるに、これをコントの影響に歸することは誤謬であらうと思ふ。ミルの言葉に僞りなしとすれば、ミルがコントに敎へられたのは逆演繹法のみである（Autobiography. p. 210）方法そのものから考へても、歷史的方法と具體的方法とは著るしき相違のあることは明である。況んやコントは歷史的方法を以て唯一の方法と看做し、ミルはこれを逆演繹法と稱して、別にそのまゝ採用せるに於てをや。

第二第三の點に就いては、尙少しく諸權威の所說を省みたい。イングラムに依れば「ミルはその初期論文第五に於ては、アプリオリ方法が唯一の研究法にして、アポステリオリ方法は全く無效で

あると主張した。彼が『論理學』を書いた時には、彼はコントからアポステリオリ方法—彼は之を逆演繹と稱した—が一般社會學に於ける眞理得達の唯一の方法であることを學んだ。然もその青年時代のアプリオリ方法を放棄するを欲せずして二種の經濟研究を區別し、その一が、他は然らざるも、該方法に依つて研究せらるべきを主張せんとした」と（History of Pol. Eco. p. 130）これに依れば、イングラムはアプリオリ方法と具體的演繹法との關係を特に論じてゐない。これは二樣に解釋し得る、一は具體的演繹法を以て、ボナーの如く、經濟學に適用されざるものと考へたるが爲めに、經濟學史中に於てはこれに觸れることをしなかつたと解することである。かく解すれば二方法を以て別個のものと考へたことになる。二は兩方法が同一なるものと解したるにより、特にこれを論じなかつたと解することである。然らばこの二つの解釋は、孰れが正當であらうか、若しくは、孰れが正解により近いであらうか、これは更に一二先人の所說を考察した後に讓る。

次にレスリースチブンの見解を窺ふに、彼は兩者が同一なることを明白に述べてゐる。「曰く初期の一論文に於ては、ミルは方法がアプリオリでなければならぬ、即ち、彼の說明に依れば假說よりの推理でなければならぬことを明言する。『論理學』に於ては、それは直接演繹法として取扱はれてゐる」と。而して「ミルはコントから逆演繹法の概念を引出した。而してミルはこの歷史的方法が社會學が一般にとつて適當であることを承認した。然もコントが經濟學を以て虛僞の科學なりとなしたるに對し、ミルは經濟學が別個の方法を用ゐる事に於て、肯定せらるべきものであることを主張した。彼の考ふるところに依れば、コントは或種の場合には直接的演繹法が社會學的研究に適用され得ることを見得なかつたのである。經濟學は正にかゝる場合の一つである。かくて彼の初期の說明は有效である。故に彼は明に歷史的方法を否定した」と、（Leslie Stephen. English Utilitarians. vol. III, p. 237-8）

假りにイングラムを以て具體的演繹法とアプリオリ方法とを同一視せるものと解するならば、彼はスチブンと共に、ボナー、ヘネーに對立するものとなる。而して同時にその方法が經濟學に適用せらるべきを認める點に於ても亦兩者は共にボナーと解釋を異にするものである。然るに歷史的方法の適用に就いては、イングラムとスチヴンとは分れる、前者はミルが經濟研究學研究を二種に分ち、その一がアプリオリ方法に依つて。行はるゝを明言し他が歷史的方法に依るものゝ如き口吻を洩らし、後者は歷史的方法が、經濟學に用うべからざるを斷定する。その孰れが正當であるかは、本稿末尾に於て考察したい。

マクラウドはミルがアプリオリ方法を以て社會科學研究の唯一の方法にしてアポステリオリ方法は社會科學に於ける眞理取得の手段として無效なるを述べたる後、アポステリオリ方法を以てアプリオリ方法の不可缺なる補助なりと云へるを著るしき矛盾なりと解し「かくの如きことが論理學者として名聲を有する同一の口から出たことは驚くべきことではなからうか」と極言する（Macleod. The History of Economics. p. 13）併しこれはこれだけでは矛盾と言ひ難い。何故ならば、ミルがアポステリオリ方法をアプリオリ方法の不可缺なる補助を爲したのは、眞理取得の手段としてゞなく取得されたる眞理の檢證手段としてゞあるからである。更にマクラウドはミルが經濟學を抽象科學

と看做せる根據を實驗の不可能に置けるものと解し、以て實驗の不可能は決して一科學を抽象科學なりと主張する論據にならないと云ふ(ibid. p. 15-18)併しこれも誤りであらう。確にミルは社會科學の對象たるものゝ一特徴として實驗の不可能を擧げてゐる。併しこれは單にアポステリオリ方法を排除する論據としてゞあつて、經濟學が抽象的演繹的科學たるを主張する論據としてゞはない。這個の論據は、社會現象の性質が「諸原因の合成」的結果なるに存する。さればマリラウドの非難は輕卒又は故意の譏りを免れ難い。

ミルに對し多大の愛敬を捧ぐる一人はバッテンである。然も彼はミルの立場が明確を缺くことを遺憾とする者である。バッテンに從へばミルの時代の經濟學には、センチメンタル派と論理派との二流が見出される。ミルの眞の感情は前者に共通なるに拘らず、ミルは論理派の擁護者となつた。「論理學」の最後の一節を讀み、でミルが次いで爲すべき事を豫想する者にとつて、ミルが歸納的、歴史的、社會學的基礎の上にすゝむの意圖を有せるは明白である。然るにミルは經濟學を演繹科學ならしむるに努力した」

最後に私が未解答のまゝに殘したる諸問題に答へようと思ふ。

私が殘した問題はミルに於て「アプリオリ方法」と「具體的演繹法」とが同一なりや否やの問題、之に關聯して經濟學が具體的演繹法の適用外にあるや否やの問題及び、歴史的方法は經濟學に適用せらるべきや否やの問題之である。

第一問に對しては、私は兩個の方法が同一であると答へる。第二問に對しては、經濟學こそ具體的演繹法の適用を受くべきものと考へられたと主張する。第三問に對しては歴史的方法は經濟學には適用なきものと看做されたと主張する。然らば私のこれ等の答の根據は、奈邊にあるのであるか。

第一問に就いて述べむに、ミルが「未定問題」に於てアプリオリ方法の例として擧げたものを省みてみよう。その場合提出された問題は「專制君主なるものは、その政治的權力をその臣民の幸福の爲めに用うるの傾向があるかそれともその壓服の爲めに用うる傾向があるか」の問題である。アプリオリ方法はこれが解決の爲めに、人間に就いての吾々の經驗を試標とする。人間がその裡に置かれたる種々なる環境に於て人性が示せる傾向の觀察及び特に吾人自身の心中を過ぎるところのものゝ觀察に依つて、「人間は專制君主の位置にある時、その力を惡用すべし」と結論する、即ち、先づ觀察に依つて一の一般原理、而も當面の對象よりは廣汎なる人性の一原理に到達する。そしてこの原理が「專制君主」なる地位にある人間に即ち、一特殊場合に適用される。そしてその人性の一原理と「專制君主」なる一特殊事情とから、結論が引かれる、かゝる論法は「論理學」第六編第九章第三節に於て論ずる經濟學の方法と全く同一であるといはなければならぬ。即ち、其處に於ては、「人性の法則と外界の事情から推理することによつて、吾等は社會現象のこの部分〔經濟現象〕を說明するが出來るであらう」と述べられてゐる(Essays. p. 137. Logic. p. 587)而もこの「論理學」第六編第九章は具體的演繹法を論じてゐるところであり、そしてそこに述べられたる經濟學方法論は、正に「未定問題」から引用されてゐる。若し具體的演繹法とアプリオリ方法とが別個のものであるならば、後者に就いての論が、前者の「一例」として擧げられる筈はないと云はなければならぬ。兩方法の合致は別な

點からも云へる。自傳に依れば具體的演繹法は既に一八三〇年に得られてゐる（Autobiography. p. 161）「未定問題第五論文は一八三一年に「ウストミンスター・リヴィユ」に發表されてゐる。そして更らに一八四四年「未定問題」中に採錄されて出版された。然も「論理學」はその前年即ち一八四三年に出版されてゐる。これ等の事情は、ミルの所說が變らなかつたことを消極的に立證するものといへよう。從つて、私はヘネー及びボナーの所說を否とする。併し乍ら、ボナーの如き誤解も多少の所以がないでもない樣に思へる。特にボナーが經濟學を具體的演繹法の適用外に置いた點に就いて然りである。具體的演繹法に於ける「諸原因の合成」なる言葉を「人性の諸原理の合成」なる意味に解する時、「富の願望」なる一原理を基礎とする經濟學が、その適用外にあるものと考へられる。ミルの言葉の中には、不用意に讀過する時、かゝる解釋をも生せしめ易いものが見出される。例へば社會學一般に對して、經濟學なる一特殊部門の存在を主張する際の如き、ミルは「富の願望」の頗る有力なるを力說する。若しこの點にのみ注意を奪はるゝならば、ボナーの如き見解が生ずる。然し乍らかくの如きは、經濟學の可能を力說せんとする特殊なる一面の議論である。全般的考察は這個の論調が、その所說の全部に非ざることを示すであらう。以上に依つて私は第一問に答へ從つて第二問に答へたことになる。

第三問は單にミルの方法理論の大要の上からみれば、頗る簡單である。先に一言せる如く、ミルは社會學的研究を二種に分つ。一は前提されたる一定の社會狀態の下に於て、一定原因が如何なる結果を生ずべきや論ずる特殊的社會科學であり、他はこの前提されたる社會狀態そのものゝが如何なる法則に遵つて生ずるやを論ずる一般社會學である。歷史的方法はこの後者に對して適用せらるゝのである。この基礎は人間及び社會の歷史的發展性である。從つて、一定の人性原理を前提する經濟學には、適用され得ないといふ結論に達する。併し乍ら社會現象は果して判然二種に分ち得るであらうか。殊にその謂ふ社會狀態の意義は、概念的に明確さを缺いてゐるものである。一社會の智識程度道德的敎養の程度階級相互の關係富及びその分配の狀態等、比較的重要なる社會的事實又は現象の全部の同時的狀態であるといふに過ぎない。殊に富の分配の狀態の如きはそれ自身で、經濟學の對象たるものではなからうか。私有財產制の如きは如何。それとも社會狀態なる言葉の表明する個々の事實は、各特殊科學の對象であり、その綜括的研究が社會學であるといふのであらうか、けれどもミルに依れば、特殊社會科學は、一定の社會狀態を前提するものである。それ故に、その前提されたる內容を特殊社會科學が論ずるといふのは矛盾である樣に思はれるが如何。この問題に答へるものは、ミル自身が如何にこれを取扱つたかである。換言すれば、その經濟學方法論に非ずして實際にとれる方法そのものでなければならぬ。ミルの「經濟學原理」はこれに對して如何なる解答を與へるものであらうか、これは私が稿を新たにして答へるべき課題である。

ミルの方法論がその先人及同時代の人達のそれに比較して、その廣さ及び深さに於て、著るしく傑出せるものであることは論を俟たない。併し乍ら、ミルの長所であると共に短所である二元的立場は、方法論に於ても亦顯著である。アプリオリ推論を以て最要なる方法と論じ乍ら、尙その結論の眞僞の判定をアポステリオリに求めんとするが如き、兎角批難を蒙り易き所以にして、マクラウ

ドの如きもこの點を責めたるは前述せる如くである。或は亦イングラムが指摘せる如く「或時はミルは經濟學を以て一般社會學から切離されたる一部門なりと云ふ。然るに他方に於て、彼の經濟學原理の表題は、經濟學が全く社會哲學の一部にして、それに對する準備的補助的なるものではないかの如き疑ひを起さしめる。かくて論理的一面に於ても理論的一面に於けると等しく、彼は二つの意見の間に立つものである』然も結局ミルはその方法論に關しては、依然として舊學派の一人である」(Ingram. History of Pol. Eco. p. 150)

（四）

ジョン・エリオット・ケアンズの The Character and Logical Method of Political Econömy は永らく英國經濟學方法論の權威ある教科書であつた(Keynes. Scope Method. p. 12)此書に於ける目的は「スミス、リカアドオ・マルサス及びミルをその最も著名なる人々とする、幾人もの論者に依つて考へられたる經濟學の性質を確定し、且つ明述し、而してかく確定されたる性質から、之に適當なる論理的方法を演繹せんとする事である(ibid. Preface)

ケアンズに從へば經濟學はトレンズ大佐の云べる如く、既にその論爭の時代を經過せるものに非ずして、尙、未だ定らざるの狀態に在るものである。かくの如きは經濟學の實地的成功に依つて、當初斯學の有せし嚴格にして論理的なスタイルが次第に放棄せられて、益々統計的性質を帶び來れるに依るものである。而して所謂原理上の相違は、斯學の哲學的方法に就いての概念の相違に、その原因が見出されると。

ケアンズは「經濟學の性質、限界及び安定なる方法を論ずるに當つて」倫理的・宗教的・心理的諸問題は之を看過し去ると共に、一、經濟學の主題たる富は、科學的取扱を受け得るものなる事、二、その生產及び分配の法則が存在すること、三、人類はその產業的活動に於ては、單なる氣紛れや偶然事に支配されずして、廣く絕えず作用し、その故に發見され、分類され、そして爾後の演繹の原理として役立たしめ得べき諸動機に支配される事、四、人類行爲の諸法則と諸動機の研究は宗教・倫理の情操及び義務と背反しない事の三つを、既に承認されたものと看做すのである。

ケアンズも亦その先人達の如く、學と術とを區別し、經濟學が學にして術に非ざるを力說する。經濟學は物理學や化學が科學たると同じ意味に於ける科學である。從つてそれは實際的目的を有しない。たゞ異る處は、經濟學の主題が富の諸事業であるに過ぎない。その諸事實なるものは諸原因の結果であつて、兩者の間には一定不變の結合がある。これが法則である。經濟學は之等の法則を明にするに存する。從つて經濟學は一切の實際問題の解說に關與しない。亦價値判斷も行はない。それは一定特殊の事實に關して、その結果はかくなるべしと述べるものであり、從つて健全なる意見の形成の爲めに材料を與へるであらう。然も、その職能は之に止まると(Cairnes. ibid. Lecture I.)

學として經濟學は如何なる科學部門に屬すべきであるか。これケアンズが答へむとする第二の問題である。前述の如くジョン・スチユワート・ミルは經濟學が物心兩者の結合的成果を論ずるものではあるが、結局兩者の法則中、心の法則が經濟學に屬するものであり、從つて亦經濟學は精神科學に屬するものであることを主張し、シイニオア亦之に同じたのである。

然るにケアンズは之に反對し、經濟學は物的法則に對しても心的法則に對しても、同樣な關係に立つもので、從つて物的科學の範疇にも、精神科學の範疇にも屬せずして、一種の中間的地位に在るものであるといふ。固より經濟學の主題は富であり、富は物的對象より成るも、然もそはそれ等の對象が物的なるが故でなく、價値を有するが故である。價値とは精神に依つて對象に與へられた屬性である。かくて經濟學の主題は複合的性質を有するものであり、之に關する法則は物心兩法則に等しく依存する故に經濟學は一種の中間的地位を占め、且つ、歷史的研究及び一般的に社會的研究を抱含する一種の研究に歸せらるべきものである。その主題は物的心理的及び精神的諸法則の結合に依る複合的諸現象にして、その職能はかゝる現象をその物的心理的及び精神的諸原因にまで辿ることである(ibid. p. 52)けれども此等の法則そのものを說明するのは經濟學者の任務外に在る。彼は前提の眞なるを立證し、次いで現象を說明すれば足るのである。

一の中間的地位を占むる科學たる經濟學は現實的科學なりや假說的科學なりや。ミルは後者なりと主張し、シイニオアは前者なりと云つた。ケアンズは早率にその一方に與するを避け、先づ「現實的」及び「假說的」なる語義を確定せんとする。ケアンズによれば、これ等兩語は、一科學の前提及び結論に就いて用ゐられる。數學が假說的といはれる時は、その前提に關していはれるのである。之に對し、その前提が自然の現實的事實の中に置かれてある科學を現實的といふのである。結論に就いて言はれる場合には、凡そ演繹推論を容れ得るまでに發達せる一切の自然科學は假說的である。之に對して單に歸納にのみ依賴する程度の科學が現實的と呼ばれねばならぬ。經濟學はその前提が現實的事實を表はすと共に、その結論は外的自然の事實に一致する事もしない事も、ある故に、假說的であるに過ぎない。從つて經濟學は前提に關して云ふか、結論に關して云ふかによつて、現實的とも云はれ、假說的とも言ひ得られる。けれどもその前提は經濟學特有のものではない。故に經濟學はその結論に着目して假說的眞理の一體系とみるべく、從つて假說的科學の裡に分類せらるべきである。

かくの如き意味に於て經濟學は次の如く定義される「人性の諸原理、外界の物的諸法則並びに幾多の人間社會の政治的及び社會的狀態を窮局的事實として承認し、以て之等の結合的作用より結果する、富の生產及び分配の諸法則を研究する學」又「人性の諸原理、外界の諸法則及び物的政治的社會的出來事の中に於て、富の生產及び分配の法則を、その原因にまで辿る科學」と(ibid. p.71)

かく定義されたる經濟學は如何なる方法を以て研究せらるべきであるか。ケアンズは之に對して歸納法は全く不適當にして、そは演繹法に依つて爲されるべきを力說する。先づ歸納法排除の論を聞くに世には經濟學は歸納法に依つて研究すべしと說く者がある。然も歸納法なる語には寬嚴二樣の意味がある。例へばミルの如きは「歸納的論理は單に、『如何にして自然の法則を確知するか』のみならず、之を確知したる後、その結果にまで之を追隨することを含む」といふ。然し乍らケアンズに依れば、かく解せられたる歸納法は演繹法の對立を爲すものでない、それは演繹法をも包含するものであると。ケアンズの解釋は正しい。ミルは直觀的ならざる一切の眞理を以て、たゞ歸納よりのみ來ると做し、一切の推理及び一切の自明ならざる眞理の發見を以て、歸納及び歸納の解釋なり

とするものである。併してゝで云ふのはかゝる廣義なるものではない。單に、事實から概括的命題を引出すといふ狹義に於けるものである。かゝる狹義の歸納法は、遂に經濟學に適用され得ない。何故ならば經濟現象の如く複雜なるものに歸納法を適用する爲めには實驗が可能でなければならないが、これは經濟學者に對しては、絕對に拒まれてゐる。彼は經濟現象を與へられたまゝに受取らねばならぬ。從つて彼が歸納法を固執する限り、彼は單なる經驗的法則以上に進み得ない「この點ケアンズはミルを援用する」故に經濟學の取扱ふ問題の解決手段としては歸納法は全く不適當であると(ibid. p. 81)

洵に經濟學者は實驗を行ふ事が出來ない。併しこの代りに窮局的諸原因の知識を得る爲めに努力するの必要なく、之を他の諸科學から採り來り、これより出發するの利便を有する。換言すれば經濟學の前提は他の知識部門の結論と近接現象とである。從つて經濟學の前提に於ては、自然科學の窮局的眞理の樹立に用ゐらるゝ歸納法に全然賴らなゝ(ibid. Lecture III. Sect. 3)

更に經濟學者は實驗の代りに假說を用ゐる。固より假說を用ゐる事は自然科學に於ても行はれるが、その意味が異る。自然科學に於ては窮局的原因及び法則に到達する手段として用ゐるが、經濟學に於ては、假說は推論者に對し既知不變の條件を與へんが爲めである。故に、這個の條件は斯學の根本的推定の演繹的發展に必須なるも、然も之を作ることは事實の本質上、現實的には不可能なる如きものである。從つて經濟學に於ては假說は決して、自然科學に於ける如く、窮局的原因及び法則の發見を援助する爲めには用ゐられない(p. 96)

既に假說を用ゐる以上、その結論が假說的眞理たるは止むを得ない。かゝる制限は惟り經濟學のみならず、一切の科學法則に就いて許されなければならぬ。云ふ迄もなく、假說實驗には必要條件の看過、推理上の缺陷等の危險が伴ふ。而してこの缺點を大いに補ふものは檢證である(p. 93)「事實」はかゝる檢證の手段として、及び事實と理論的推理の不一致を生じたる場合、この不一致の原因たる妨碍原因の性質を確知する手段として使用せられる。既に演繹階段に到達せる科學に於て、經驗に訴へらるゝば正にかくの如き方法に於てのみである(ibid. Lect. III. Sect. 4)

「經濟學の性質及び論理的方法」第四講は幾多の實例を擧げて、經濟法則が現實の事實を表はすものに非ずして、傾向を表はすものであることを云ふ。そしてこの事よりして吾々は次の事を知る。即ち、經濟法則は事實に訴へる事に依つては樹立され得ないものである。經濟法則は一定の條件の下に作用する一定の人性原理より演繹されたる傾向なるが故に、それはかゝる原理及び條件の存在が立證され、主張されたる傾向が前記の材料よりの必然的結果として生ずる事が示される事に依つて樹立される。從つてその論理過程にして正當ならば、經濟學的推理に於ては、賴るべきものは心的又は物的法則でなければならぬ(p. 111)

經濟學の法則の性質にして前述の如しとするならば、次の問題は之等の法則が如何程まで經濟現象の說明に役立つかである。

經濟現象の說明とは之を窮局の公理に、即ち理論の根源たる心的又は物的原理に歸せしむることである。這個の原理の存在及び之が必然的結果が該現象に到ることが示される時、その現象の說明

は完全なりと看做されねばならぬ。

たとへ論理過程にして正確なりとするも、尙往々不完全は免れ難い。何故ならば、當該現象を生ずるの法則に就いての知識が不確定であり、又その下に之等の法則の作用する諸事情の不知が存し得るからである。天文學を除けば、この二點に於て絶對の完全を有する科學はない。たゞ自然科學の多くは第一の點は之を滿たすが、經濟學は啻にその法則が精確なる數量的表現を許さゞるのみならず、第二の點も亦數學的に述べ得る程完全に確知され難い。從つて蓋然的性質及び屢推測的性質の議論を行はざるを得ない。これよりの結論は固より蓋然的推測的性質を有し、それ故に自然科學の結論の如き精確なる形態を有し得ない(p. 134)先にケアンズは經濟學の法則も進歩せる自然科學の法則に於ては、その「傾向」を表はすに過ぎないと說いた。然も一歩を進めて論ずるならば、自然科學の法則も共に「傾向」を表はすに過ぎないと說いた。然も一歩を進めて論ずるも、經濟學其他、前提を人性の諸原理より導く學にありては、その本質上これを計量し得ない。從つて數學的表現を用ゐ得ない。從つて這般の諸科學は遂に精確科學たり得ないのであると。(ibid. Lect. V.)

ミルに於て、多少とも明白となり來つた歷史的傾向は、ケアンズに至つて、却つて演繹的傾向に打消されるの現象を示した。若しケアンズを以て獨創力ある最後の正統派學者とするならば、正統學派の方法論は結局演繹的傾向の力說に終つたと言はなければならぬ。けれども正統學派の方法論史を論ずるは、本稿の目的ではない。私はたゞミルの方法論の史的價値の一斑を示す爲めに、ケアンズを援用せるに過ぎないのである。以上。

前號（第二十五卷第二號）目次

◉近世初期の失業對策と就業權論　高橋誠一郎
◉貨幣數量說と貨幣本質觀との論理的關係　萩原吉太郎
◉經濟價値論管見——波多野鼎氏の『近著』價値學說史』を讀みて——　永田清
◉景氣論に關する近刊書三　小高泰雄

●一冊定價金五拾錢（〒共）
●半ケ年分金貳圓九拾錢（〒共）
●一ケ年分金五圓四拾錢（〒共）
郵稅含壹錢五厘
●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限
昭和五年一月廿一日印刷納本
昭和六年二月一日發行
毎月一回一日發行
第二十五卷第二號
三田學會雜誌
禁轉載
編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目三番地慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十三番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十三番地　金子活版所
發賣元　東京市芝區三田武丁目壹番地　丸善株式會社三田出張所　電話高輪一九三六番
●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會